

幼稚園教育の実際指導の充実へ

及 川 ふ み

この頃は、幼稚園の研究集会もその数、相当多く催されるようになってきた。昭和三十一年中に私共に直接に関係の深いものだけとりあげてみても、文部省主催のものおよびその四回、全国国公立幼稚園関係のもの二回、その他全国各都道府県単位に主催された研究協議会など数えあげれば相当数ののぼることであると思われる。

そしてこれらの研究集会毎に、相当数の参加者があって一応どの協議会もその成績をあげている現状である。

又一方幼児教育全般にわたっての指導書ともいふべき参考資料としての出版物もつぎつぎと発行せられこれまた、研究集会同様に一般に多くゆきわたって読まれているようである。

こうして各幼稚園相互の関係においての研究会についての研修も、又個人個人の知識の取得についても、相当の程度までの研究の域に達しているかの様に見えるのであるが、これを幼稚園の現場においての実際指導の点ではどうかであるかとふりかえてみると、必ずしもその研究と一致して進んでいるようにも考えられないのではなからうか。

幼稚園の教育目的や、その目標は早く、昭和二十三年に学校教育法によって明示されており、昭和三十年には文部省は改訂された指導要録が公示され、つづいて昭和三十一年にはこれまた久しく待望された幼稚園教育要領が示されたのである。ことに幼稚園教育要領は幼稚園教育の目標を具体化し、指導計画の作成の上に役立つようにしたと文部

省でも説明のあるように、幼稚園の保育内容の基準が示されたものである。

我が国に幼稚園が創設せられた八十年前の当時を思えば、幼稚園はただ就学前の幼児の教育の重要性にかんがみてという大まかなことよって発見せられ、これに直接関係せられた教育先覚者方はその計画実施について苦心努力せられたことを追想するのである。ことにその保育の内容については、子どもたちに歌わせる歌の作詞からはじまり、その作曲、童話の創作、遊びのさまざまなど、一つとして当時の先生方の創意工夫によらないものがなかったのであるが、その点今日の幼稚園教育に関与するものは恵まれた状態におかれているともいえるのであろう。

そこで折角研鑽された豊富な知識によって現場の幼稚園の実際指導の進歩がおくれがちの現状であるのはどういふ点にかかわっているのであろうかということになってくるのである。

それにはいろいろの点があげられることであろうが、その主なるものを考えてみると次の五つのことがらもその問題点ではなからうか。

一、園長や主任などが幼稚園教育の実際指導に対しての理解とその指導の点

一、教諭の資質の問題

一、教諭の担当する幼児数

一、保育室の広さ

一、施設設備の点

などがあげられてくる。

以上の五つのうちでも、第一にとりあげた園長や主任などの幼稚園教育の実際指導に対しての理解とその指導は、幼稚園実際指導の進展に重大な関係があるものといえるのである。昭和三十一年十月に文部省主催の園長研究協議会の分科会の研究協議題として、

幼稚園において教師の指導力の向上を図るため、園長はどのようにしたらよいか。

を、とりあげられ検討されたのであったが、ひとり教諭の問題のみでなく、園長そのものの研究はいかにあるべきかも含まれてよいのではなかったかと感じられたのであった。園長は幼稚園教育に対しての専門的の知識と、これの実際指導についてのよき理解者であり、指導者であることがのぞまれてならない。

その二の幼稚園教諭の資質

現在の幼稚園では幼稚園教諭の有資格者が約半数であるという点、即ち専門の養成機関の終了者が、在職者のう

ち少人数であるという点、又講習その他研究の機会に参加して研修してもその知識の取得が、不充分であったり、またこれを活用する能力が弱かったりすること、知識を知識としてもち、これを実際の場に適切活用することが少なかりたりすること、などが考えられる。

その三に 一教論の担当する幼児数

一教論の担当する幼児数は四〇名以内とするの設置基準をはるかに越えた幼児数を担当することは、実際指導のすめかたに障害がおこしやすいことはいうまでもないことであるが、この点はここ一二年前より各園とも、幼児数の減少という現状で自然解決されてくることも考えられる点ではあるが、また別の経営面から必らずしも一組の幼児数の減少ということもむずかしいことであろう。大体一組三十五名が最大の線ではなからうか。

その四に 保育室の広さ

保育室の広さは保育の実際に大きな関係があつて、一組の幼児数が多少多くなつていても、保育室の広さに余裕のある場合には、これによって指導に妨げをおこすことも少ないのであるが、狭い保育室に多数の幼児を收容することは教育の実際ことに保育内容を取扱うことに困難なことであつて幼児たちの気分落ちつきを失なわせ、神経をいら

だたせることが多くなつてくるのである。

その五に 施設設備の点

幼稚園の環境を如何に整備するかという問題も園長研究協議会の課題であつた。幼児の生活環境をととのえること即ち幼稚園の施設設備を整備して、教論の実際指導の面にあつて幼児たちが自ら実際に経験する機会を充分に与えられなければその指導の実績をあげることはむずかしいことである。

以上幼児教育の実際指導に大きな関係のあることがらをあげてみたのであるが、そのうち特に、三、及び五、即ち一組の幼児数、施設設備は経営上にも大きな影響もあることで、その解決に相当の困難もともなうことであるが、二の教論の資質の点はとにかく幼稚園の成果をあげるのに直接重大な関係のあることであるからこれを先決問題としてとりあげられなくてはならないと思われる。教論にその人が得られない場合は、いかに広い保育室をもつても、或はいかに豊富な設備があつても、これを充分に活用することはむずかしいことである。又これと反対にその教論に有能の人が得られれば、乏しき設備も有効に、不十分な保育室も工夫して使用することができるわけである。

しかし現状のある部では、往々にして施設設備について

重点的に経費をかけ、一般社会への外部的な環境のみに注意をくばるところもあるようで、たとえば、建築物、運動具などの設備などのみをととのえ、幼稚園として中心的存在である教諭の資質ということを軽視し、ここに人件費の緊縮ということなどもあるのは、幼稚園教育としてはまことに寒心にたえないことである。これと又他方の問題として、幼稚園によき人が得られたいということもありうるのである。それは幼稚園の教諭の身分の保障、待遇問題などが大きくこれからむことも考えさせられる重大な点である。つまり幼稚園教育が義務制にまで発展した場合にはこれらのすべての問題が解決せられるのであって、幼稚園教育に関係するものが常にその念願としていえることである。

今日幼稚園の山積する問題を語り合うものの最後の到達点は、「幼稚園教育が義務教育でないために」というのはただ不満な解決として終るのである。

しかしこの反面実際の現場につとめる幼稚園の教諭の多くの人々は待遇問題、身分保障問題に常にからんでいるのではない。幼な子に対するあつき情熱はこれらのことはあまり問題ではなく、ひたぶるに子どもの世界に没頭されている姿も多く見うけられることも事実である。

それは各学校、小学、中学、高等学校などそれぞれの各種研究会に参加状態などをみても、幼稚園教諭は数においても、それに臨む態度においても最も優っていることは衆知の事実である。

これは幼稚園の教諭は多く年齢層が若くこれらに参加するのによき事情のもとにあることもその因となるのではあるが、また一方幼児たちに対する教育情熱の旺盛なこともいうまでもないことである。今はただこれのみに力を得て幼稚園教育の実際の進展をのぞむより外はないと思われる。そこで最後ののぞみはこの情熱のむかう道の歩みかたであって、研修についてはこどもともにもあるという点である。研究発表の為の研究でなく、こどものための研究という地についたものであるということに帰着するのである。幼稚園教育については、どこまでもこども一人一人について忠実なる指導ということがその大きなねらいであると考えるときに、そこには流行の道もなければ、一筋に限られた道もない。一人一人のこどもについてそれぞれの歩む道をひらいていかねばならないことである。手ぢかな道であってこれまたむずかしい道である。このいくつかの道を見つけて進ませることが幼稚園教育の実際指導に最も重要な問題であると考えられる。